ホワイトヘッドの哲学における意識論
――心の哲学との対話に向けて――

佐　藤　陽　祐

はじめに

本稿はホワイトヘッド哲学における意識論を展開する。ホワイトヘッドの主著である『過程と実在』において示される「有機体の哲学」は、ホワイトヘッドが構築する体系に基づき、人間の経験にとどまらずこの宇宙における多様な事象について整合的かつ経験的な解釈を試みる。「有機体の哲学」とはいわば、素粒子からブラックホールまで森羅万象のあり方を一般化して、あらゆる主体の経験として解釈しようという野心的な試みである。これほど大風呂敷を広げた懐の深い体系ならば、われわれ人間の意識のあり方やその働き、構造についてもきっと明らかにしてくれるだろう。ホワイトヘッドの哲学において意識がどのように説明されるのかを見ていきたい。以上が、本稿における表向きの関心であり、ホワイトヘッド研究において彼の体系に基づく意識論を展開し、確認しておくこと自体にも意義があると考える。しかし、こうした目的を持つ背景がある。ホワイトヘッド哲学の意義を検討するためには、彼の述べる経験によるテスト[1)]もさ

1）哲学における発見の方法について、ホワイトヘッドは以下のような比喩を述べる。「発見の真の方法は、飛行機のフライトのようである。それは、個別的観察という大地から出発する。それは、想像的一般化という薄い空気のなかを飛行する。そして、合理的解釈によって鋭くなった、新たな観察をするために、再び着陸する。」［PR5］
また、ホワイトヘッドは、経験を解釈するための一般的図式の妥当性を測るた

ることながら、ホワイトヘッドのテクストに沿った内在的な解釈を行うのみならず、他の哲学分野との対話によって、「有機体の哲学」の真価を問う必要があると考えるからである。このような問題意識のもと、ホワイトヘッドの哲学における意識論を対峙あるいは対話させたいのは心の哲学である。そのためにも、①ホワイトヘッドの意識論を彼の体系に沿って確立したものとして提示する必要がある。そのうえで、②彼の意識論と呼びうるものが心の哲学とどのような点で接合しうるのかについて検討していきたい。以上の試みが成功するならば、他の哲学分野や哲学者との対話を行いうる地平を開く一端となり、一般性を有するものとしてのホワイトヘッドの体系の意義を確認しうる一助となると考える。

ホワイトヘッドの体系における意識の扱われ方

一般に人間の経験の中心は意識にあると思われる。というのも、われわれが日々生活し、さまざまな活動をするなかで、非常に単純な運動においても意識が常に存在し、働いているように思われるからだ。たとえば、通勤のために最寄り駅へ歩くにしても、私の視界には街の風景、他者の歩く姿や自動車などが目に映る。また、朝の街の喧騒が耳に入ってくる。歩きながら、地面のアスファルトの反発を感じたり、風のそよぎの心地よさも感じている。このように、ただ駅へ歩く道すがらでさえ、私の経験のうちにはさまざまなものが現れている。意識経験は常に、こうしたさまざまな現れを持つ。それゆえ、経験とはわれわれの意識に現れてくるものの総体であるように思われる。つまり、意識経験こそが私たちの経験のすべてであるように思われるわけだ。その結果、意識があるからこそ私たちはさまざまな経験をしていることがわかり、意識があることが何らかの経験をすることの前提となっていると考える。ところが、ホワイトヘッドの体系に

めに、経験に訴えることを主張する。「究極的なテストは常に広範であり、繰り返される経験である。合理的図式が一般的であればあるほど、それだけこの最終的な（経験への）訴えは重要なものとなる。」［PR17］

おいては、意識は経験の前提とはならない。ホワイトヘッドは明確な原理として宣言する。

> 私が採用している原理は、意識が経験を前提としているのであって、経験が意識を前提としているのではない、ということである。［PR53］[2)]

人間にとって経験の中心であり、前提であると思われる意識が、経験を成り立たせる基礎となるのではなく、経験のほうが意識を成す前提であるといわれる。これはどういうことだろうか。

従来の認識論は経験に先立って意識を前提とし、意識的主体とその対象である客体との主―客構造を持つ。たとえば、眼前のある対象を見るという経験においても、「私」や「精神」や「自我」や「実体」と呼ばれる主体とその主体に対峙する対象とが前提され、両者のあいだの関係が探られることになった。しかし、意識を有する主体を経験の前提とすることは、主体が「存在するために他のいかなるものも必要とせずに独立自存するも

2）引用文献については、［記号 頁数］のように示す。翻訳も大いに利用させていただいたが、地の文との兼ね合いなどにより、字句を変更した箇所もある。訳者の方々に感謝したい。引用文中の傍点は原文でイタリック表記された箇所を、〈　〉は原文大文字で表記された箇所を、……は引用者による省略を示す。

PR: Whitehead, A.N., *Process and Reality; An Essay in Cosmology,* Corrected Edition, Ed. by Griffin David Ray and Sherburne Donald W., The Free Press, 1978.（『過程と実在（上）』山本誠作訳、松籟社、1984年、『過程と実在（下）』山本誠作訳、松籟社、1985年。）

AI: Whitehead, A.N., *Adventures of Ideas*, The Free Press, 1967.（『観念の冒険』山本誠作他訳、松籟社、1982年。）

Kraus: Kraus, Elizabeth M., *The Metaphysics of Experience: A Companion to Whitehead's Process and Reality*, Fordham University Press, 1998.

Harman: Gilbert Harman,"The Intrinsic Quality of Experience", *Reasoning, Meaning, and Mind*, Oxford University Press, 1999, pp. 244-261.（翻訳について、鈴木貴之訳、ギルバート・ハーマン「経験の内在的質」（信原幸弘編『シリーズ心の哲学Ⅲ 翻訳編』勁草書房、2004年、88-120頁）も参照させていただいた。）

信原（2002）：信原幸弘『意識の哲学　クオリア序説』岩波書店、2002年。

の」となることを意味する。その結果、主体と対象との関係のあり方が問われることになり、さらにその関係についての説明そのものが困難となる。というのも、独立自存する主体がいかにして、またいかなる意味において対象と関係しうるのかという問題が生じるからだ。したがって、ホワイトヘッドは次のように述べる。

> 実体の哲学が前提するのは主体であり、その主体がのちに与件と出会い、与件と関係することになる。有機体の哲学が前提するのは、与件であり、与件が感受（feeling）によって出会われ、しだいに主体の統一性を獲得していくことになる。［PR155］

多様な意識経験を有する主体としての「私」が、いかにして外界の対象を意識において経験しているのか、意識における心的表象（mental representation）と対象そのものとはどのような関係を持つのか。実体の哲学は主体を前提とし、与件（＝対象）との関係のあり方を説明するうえで、このような問いを突き付けられ、困難を生むことになる。

他方で、われわれは「現在の私があるのは、あのときの経験があるからだ」などとごく自然にいう。したがって、われわれは経験が「私」を作ることを知っている。「私」はさまざまな出来事を経験して成立している。それゆえ、「私」を作るのは経験であるといえる。たとえば、言葉を見聞きし、書いて練習したり、作文したり、文法を学んだりすることによって、われわれは一つの言語に習熟する。また、各種の練習を積み、運動を反復することによって技術を身につけ、スポーツや楽器の演奏も上達していく。もろもろの出来事を経験することから、また新しい経験を生み出すものとして「私」はある。つまり、「私」という主体は最初から前提とされ存在するのではなく、多様な出来事や事物との関係、すなわち何かとかかわり合う（＝経験する）ことから生み出されているといえる。われわれは日常生活において、当然のように主体としての「私」が存在することを認めて

いる。しかし、ホワイトヘッドにいわせれば、このように主体を前提とすることは、「具体性を置き違える誤謬」（the fallacy of misplaced concreteness）［PR7］の一種となる。すなわち、「私」という主体の存在は多様な経験から引き出される抽象にすぎず、われわれは、抽象的なもの（＝「私」）をもっとも具体的な事実ととらえる誤謬を犯している。そうではなく、「私」が成立する以前の出来事や事物との関係こそがもっとも具体的な事実なのである。

したがってホワイトヘッドは、主体や客体ではなく、与件との「関係そのもの」を前提とすることによって、与件との諸々の関係からどのようにして統一性を備えた主体が生成してくるのかと考える。さらに、以上のようなホワイトヘッドの体系における根本的特徴から、意識を持つ主体を前提とすることが当然のことながら否定される。したがって、経験が意識を前提とするのではなく、意識が経験を前提とするのである。それゆえ、以下のようにいわれる。

> 最後に、ここで概要が述べられた宇宙論の構図においては、哲学の伝統がもつ一つの暗黙の仮定が否認される。その仮定とは、経験の土台をなす要素は、意識、思考、感覚―知覚という三つの成分の一つないしすべてによって記述しうるということである。［PR36］

ホワイトヘッドの「有機体の哲学」の構図においては、これまでの哲学的伝統において認められてきた、意識や思考、感覚―知覚などの高次の精神的な働きを前提とすることが否定される。その結果、意識以前の経験（＝他の与件との関係）によって、その都度、意識を有した主体が生まれてくることになる。それゆえ、意識は経験によって構成されることになる。

それでは、与件との諸々の関係からいかにして意識を有する主体が生まれてくるのか。また、主体の生成とともに、意識はいかにして生じてくるのか。ホワイトヘッドの体系において、意識を有する主体の発生論を確認

しなければならない。

意識を有する主体の発生論

1．命題について

ホワイトヘッドの哲学においては、主体は前提とされるのではなく、出来事や事物との関係によって生み出されるものとして考えられている。それゆえ、主体の「存在」（being）よりも「生成」（becoming）のほうが優位にある。主体を目指す生成において、主体以前の出来事や事物（与件と呼ばれる）との関係は、総じて「感受」（feeling）と呼ばれる。また、一つの主体を目指して活動する単位が「現実的存在」（actual entity）と呼ばれる。現実的存在は、その生成活動において各種の「相」（phases）を経る。各種の相の違いは、出来事や事物とのかかわり方、つまり、感受の仕方の違いに基づく。現実的存在の生成には種々の感受の相があり、各種の相において与件とのさまざまな関係から一つの主体が生成し、最終的には「充足」（satisfaction）という段階を迎え、この「過程」（process）をつうじて一つの現実的存在は主体として世界において「実在」（reality）するに至る。

こうした生成の過程において、意識的主体の成立には「命題」（proposition）という与件が不可欠となる[3)]。というのも通例、意識的主体とは「何かについての心的表象」を意識において有する主体であり、この「何かについての心的表象」のうち、「何かについて」を生成途上のプロセスに対して提示する（propose）のが命題であるからだ。さらに「……客体的与件における一つの要素としての命題を離れては、いかなる意識も存在しない」［PR243］といわれる。つまり、意識の発生には命題が必須の要素なのである。

3）ホワイトヘッドが述べる「命題」とはどのような概念なのか、現実的実質の生成における命題の役割やその機能については、拙著『日常の冒険 ホワイトヘッド、経験の宇宙へ』春風社、2021 年、23-101 頁 にて詳述している。

とはいえ、現実的存在の生成段階において、命題そのものが意識における心的表象として表れているわけではない。というのも、生成の途上において形成される命題は第三の相における与件であり[4)]、この段階において意識は発生していないからである。したがって、命題は心的表象を最終的に形成する土台を成す与件だといえる。つまり、命題は現実的存在の生成における中間的な与件であり、後続の「補完相」(supplemental phase）において、「何かについての心的表象」のうちの「何か」として命題が生成に対してどのように寄与するのか見る必要がある。

「有機体の哲学」の構図にしたがえば、最終的に多様な経験において何かが意識的に主体に表れるためには、その「何か」が経験において限定されており、意識の発生以前に「何か」として表れていることが必要となる。命題は現実的存在の生成のなかで、主体を目指す現実的存在が最終的に何を経験する主体として成立するかに関して、その「何か」を提示するための与件として機能する。つまり、命題は生成において主体が経験しうるものについての可能性として提示される。ホワイトヘッド研究において、基礎的なホワイトヘッド解釈について定評のあるクラウスの解説をみよう。

> 論理的主語と述語の、結合体(nexus)と永遠的客体の共在性(together-ness)は、可能的である。それは、すでに実現されたものとして与えられているのではなく、合生しつつある主体の内で実現可能なものとして提示された共在性である。その永遠的客体が結合体のうちで実際に実現されているか否かは、真なる命題を偽なる命題から区別する付加的な性質ではあるが、そのような性質を持つ命題の本質的性格ではない。 ［Kraus95］

4）現実的実質の生成において初発の「物的感受」（physical feeling）の相、第二の相である「概念的感受」（conceptual feeling）の相に続き、「物的感受の相において感受される与件」と「概念的感受の相において感受される与件」とを統合する「命題的感受」（propositional feeling）の相において、命題は感受される。

命題は「論理的主語」(logical subject) と「述語的パターン」(predicative pattern) とが統合されてできる与件である。論理的主語とは、生成における初発の相で得られた、いまだ何らの概念的な分析も加えられていない、いわば事実や出来事についての生(ナマ)の与件が、指示詞としての「それ」(it) に還元された与件である。述語的パターンとは、生成の第二の相で得られた、純粋な可能態としての「永遠的客体」(eternal object)[5)]である。生(ナマ)の与件が指示詞としての「それ」に還元された論理的主語と、「それ」が何であるのかを限定する永遠的客体が述語的パターンとして統一された与件が命題である。したがって、言語を用いて命題を表現すれば、たとえば命題は「それはリンゴ (赤、丸、果物) である」といったものになる。しかし、ホワイトヘッドの命題は論理学などにおいて扱われる命題とはまったく異質なものであり、言語的な構造を有しはするものの、ホワイトヘッド的命題は言語ではない。あくまで、生成における与件の一種として、命題はその役割を有する。つまり、論理的主語と述語的パターンから構成される命題は、世界における「なにものでもない」生(ナマ)の与件の特徴の一部をある仕方で取り上げた (あるいは切り分けた) 一つの可能的表現といえる。

クラウスは、論理的主語と述語的パターンが一つの与件として共にある命題のあり方を、経験にとって「可能的なもの」と説明する。つまり、命題は現実的存在の生成において、すでに実現されたものとしてではなく、生成過程の後に現実的存在がどのような経験として成立しうるのかという点について、「それ」が何であるのかを限定することによって、経験として実現されうる可能性を示す。したがって、命題は成立しうる経験の可能

5) 生成内の第二の相 (conceptual feeling) において、現実世界をある秩序や性質をもって分節するための要素「永遠的客体」(eternal object) が現実世界のうちに見出される。不定の現実世界というまだ限定的な形式をまとっていないモノたちのうちに、それらのモノたちが示すことが可能な質や形式 (=「永遠的客体」) を、現実的実質がとらえることを「概念的感受」(conceptual feeling) という。ホワイトヘッドの体系において、生(ナマ)の与件を限定する質や形式としての永遠的客体は、「純粋な可能態」(pure potentiality) としての存在身分を持つ。

性を示す与件であるといわれるのである。また、論理的主語としての「それ」（前述のクラウスの引用では結合体と呼ばれている）について成される述語的パターンによる限定が実際に実現されているか否かは、命題を感受する段階では不明である。たとえば、「それ」が「赤い」のか「黒い」のか、「トマト」であるのか「ナス」であるのか、命題は「それ」について永遠的客体によって述語づけられる可能性が多様にある。「それはトマトである」という命題が実際に実現されている事実についての（知覚や認識の）経験となるかどうかは、生成のより後期の相において「判断」（judgement）されることになる。つまり、「それはトマトである」という命題の真偽は、過去において「それ」がトマトであるという事態が事実であったとしても、生成過程のより後続の「補完相」において改めて問われることになる。最終的にその経験がトマトについての何らかの経験として成立するか否かは、プロセスの後期相において決定する。したがって、命題的感受の相においては、命題の真偽は命題にとって副次的な問題であり、命題の本質的性格ではないといわれる。それでは命題の本質的性格とは何であろうか。

> 命題は感受のために提案された客体的な誘因（lure）における要素であり、感受へと受容されると、命題は感受されるものとなる。［PR187］

ホワイトヘッドは、命題がそこからさらなる経験を引き出す「感受のための誘因」（a lure for feeling）［PR184-185］であることを強調する。つまり、命題は、現実的存在の生成過程において後続の諸相の感受を惹起させ、それらの相において与件として機能することになる。また、経験にとって「可能的なもの」である命題は、「単なる所与に縛りつけられない、感受が生まれるための源泉をなしている」［PR186］のである。さらに、命題について以下のようにもいわれる。

……たいていの論理学者たちは、命題を判断の単なる付属物と見なしている。その結果、偽なる命題は塵芥の山に捨て去られ、無視されてきた。しかし、実在の世界では、命題が真であるということよりも、興味深いということのほうがもっと重要である。真であることが重要なのは、それが興味深さを増加する点にあるのである。　［PR259］

命題はその真偽よりも、それが「興味深い」かどうかが主体を目指す現実的存在にとっては重要なのであり、命題がもたらす興趣からどのような経験のあり方がさらに引き出されうるかが問題となる。以上より、現実的存在の生成において命題の本質的性格とは、生成する当該の現実的存在がどのような経験をする主体として成立しうるのかという可能性を示すものであり、生成の過程において命題的感受に続く後続の相の感受を惹起する役割を果たしうる与件であるとまとめることができる。

2．コントラストから意識へ

命題の感受によってさらに惹起される種々の感受の相がある。それらは、「比較的感受」（comparative feeling）と総称される。比較的感受のなかには「知覚的感受」（perceptive feeling）、「想像的感受」（imaginative feeling）、「意識的知覚」（conscious perception）、「直観的判断」（intuitive judgment）というようにさらに感受の区分がある。これらの種々の感受は、命題という与件をいかに扱うかという点においては共通している[6)]。すなわち、命題は「コントラスト」（contrast）の要素として扱われることになる。

われわれが追わなければならないのは、現実的存在の生成において、いかにして意識を有した主体が成立するのかという点についてである。何かについて意識的であるということが、「意識において、ある心的表象を有

6）あるいは、命題の形成のされ方によってこれらの種々の感受の仕方も異なることになる。とはいえ、命題によって惹起される感受であるという点では以上の感受は共通している。

する状態であること」を指すとすれば、意識的な心的表象がいかにして生じるのかという点について説明することが求められる。したがって、現実的存在の生成においても、いかにして意識的な心的表象が生じうるのかを明らかにする必要がある。この問いは、次のようにも言い換えることが可能である。すなわち、世界についての何らかの表れがいかにして意識的なものになるのかという問いである。

現実的存在の生成のなかで、世界についての何らかの表れを示す与件が命題であった。したがって、命題がいかにして意識的な心的表象として扱われるようになるのかを見ることになる。命題的感受の相以降に生じる種々の感受の相において、意識の発生は「コントラスト」という与件とともに語られる。提示された命題が主体を目指す現実的存在にとってどのような意義を持つものかを決定するために、命題は、命題の論理的主語がそこから派生してくる生（ナマ）の与件としての「結合体」（nexus）と「コントラスト化」（contrast）されることになる。このコントラストが、「類的コントラスト」（generic contrast）［PR266］と呼ばれる。

> そのような「コントラスト」のなかでもっとも重要なものは、「肯定―否定」のコントラストである。そこでは命題と結合体とが一つの与件における統合を獲得するのであり、その結合体を成しているものは、命題の「論理的主語」なのである。［PR24］

> このコントラストは、「肯定―否定のコントラスト」と呼ばれていたものである。それは、物的感受における客体化された事実の肯定と、命題の感受におけるこうした肯定の否定であるところの、単なる可能性との間の、コントラストである。またそれは、この現実世界における独特な諸事例に関する「実のところ」と「あるかもしれない」との間のコントラストである。このコントラストの感受の主体的形式が、意識なのである。このように、経験において、意識は、知的感受のゆえに、また

これらの感受の多様性と強度に比例して、生じるのである。［PR267］

物的感受によって経験された現実世界は、何ものによっても改変されることのない過去の「頑強なる事実」（stubborn facts）であり、それらはまだ何らの概念的分析を加えられていない、いわば生（ナマ）の与件である。物的感受によって、過去は肯定された事実として生成の過程において受容される。一方で、生（ナマ）の与件から派生する命題は、それらの事実に対してあくまで現実世界の「表れ」となりうる可能性でしかない。すなわち、命題はあくまで経験における可能性でしかなく、事実ではない。したがって、可能性としての命題はこの意味において事実（＝肯定）に対する否定といわれている。以上のように生（ナマ）の与件と命題という二つの要素が、「肯定―否定のコントラスト」として比較的感受において統一される。さらに、ホワイトヘッドは二つの要素がコントラストとして統一されることに、現実的存在における意識の発生を見るのである。

経験にとって可能的な世界についての表れが命題として提示されたのち、命題は生（ナマ）の与件との統合によって、コントラストとなる。したがって、このコントラストがわれわれにとっての意識的な心的表象となる。しかし、このコントラストが意識的な心的表象となる要件はなんであろうか。

> 意識的な気づき（awareness）において、事実のうちにあるプロセスとしての現実態（actuality）は、この現実態が何であるか、また何でありえないか、あるいはこの現実態が何でないか、またそれが何でありうるのかを例示する諸々の可能性と統合されている。別の言い方をすれば、限定性、肯定、否定と関連することのない意識は存在しない。また肯定は、否定とのコントラストを含み、否定は、肯定とのコントラストを含んでいる。さらに、肯定と否定は、個々の現実態のもつ限定性との関連を離れては、等しく無意味なのである。意識とは、われわれがどのように肯定―否定のコントラストを感受するか、とい

うことである。［PR243］

ここでいわれている可能性とは、この可能性が現実態（＝生（ナマ）の与件）についての可能性を例示するといわれていることから、命題の有する可能性であると解釈できる。ホワイトヘッドは、意識的な気づきが生じるときには、現実的存在の生成において生（ナマ）の与件と命題が提示する諸々の可能性との統合があるという。たとえば、リンゴが赤いことを知覚する（意識的に気がつく）場合には、「それはリンゴである」や「それは赤い」という命題が形成される。これらの命題は、生（ナマ）の与件のうちにあった要素（リンゴや赤さの永遠的客体）を述語的パターンとして成立している。この場合、「事実ではない可能性でしかないもの」（命題＝否定）が、事実としての生（ナマ）の与件という肯定に対してコントラストを成している。このコントラストが、事実と可能性とが作る「肯定―否定のコントラスト」である。

しかし、上記の引用からもう一つ肯定と否定の意味があることがわかる。この現実的存在が経験するものが「何であるか、また何でありえないか」、あるいは「それが何でないか、それが何でありうるのか」を例示する肯定的命題と否定的命題があるということである。すなわち、命題どうしの肯定―否定コントラストがあるということだ。「それはリンゴである」や「それは赤い」という肯定的命題に対して、否定的命題とは、「それはリンゴではない」＝「それはトマトである」、「それはミカンである」、「それはパプリカである」や、「それは赤ではない」＝「それは緑である」、「それは黄色である」、「それは青である」といった命題である。「それはリンゴである」や「それは赤い」という肯定的命題がコントラストとなり、「このリンゴは赤い」という意識的な知覚経験に帰結するにしても、この知覚経験はこの肯定的命題によってのみ成立しているわけではない。なぜなら、事物の解釈は多義的であり、さまざまな解釈の可能性を備えているからだ。光の加減によっては、リンゴの色は、黄色や緑にも見えるだろうし、暗い部屋のなかではリンゴは色すら見えることはなく、触れることでそれがリ

ンゴであることを確かめることができることもある。また、遠くからそれを眺めたら、それはリンゴではなくパプリカやトマトに見えることもあるかもしれない。

したがって、ホワイトヘッドがここで述べているのは、事物にはそれを限定するような明確な境界線のようなものはなく、あらゆる存在者と関係づけられることで、この存在者が特有の状況のなかで意味づけられるということだ。さらに、「それはリンゴである」や「それは赤い」という肯定的命題の背景をなすような、無数の解釈の可能性を肯定的命題に対する否定として備えていなければ、われわれ各自が固有に持つ意識は存在しないということである。以上より、意識の発生には、命題による生（ナマ）の与件の限定性に加え、さらに肯定、否定のコントラストが必要だといわれるのである。

> 物的および観念的な始源的な感受については、すでに言及されてきた。また肯定―否定コントラストへの最終的総合も、言及されてきた。しかし意識への統合の始まりと終わりの間に、「命題の感受」の成立が存在している。命題の感受とは、その客体的与件が命題であるところの感受である。そのような感受は、それ自身のうちに、意識を含んではいない。しかしすべての形態の意識は、命題の感受と、物的感受か概念的感受か、とにかくほかの感受とのさまざまな仕方の統合から生ずる。意識は、そうした諸感受の主体的形式に属しているのである。
> ［PR256］

生成における意識の発生に対して、命題が必ず関与する。命題それ自体が意識における所与とはならない。しかし、上記の引用において主張されるように、意識は命題と他の感受の与件との統合から生じてくるのであり、その統合のあり方がコントラストという形式なのである。

現実的存在の生成において、命題は世界についての何らかの表象を、主体を目指す現実的存在に提示する与件であった。さらに、この命題は、過

去の事実である生（ナマ）の与件ならびに他の命題ともコントラストとして統一される。その結果、当該の現実的存在は、意識を有する主体となることを確認した。こうした説明の図式にしたがえば、生成の過程においてコントラストという与件は、心的表象に相当するものと解釈することができる。以上より、ホワイトヘッドの図式における意識の発生過程は、主体を目指す現実的存在にとっての経験の可能性を提示する命題の形成と、その命題から構成されるコントラストという与件の感受という二段構えになっていることが確認できる。この命題とコントラストの区別は何を示唆しているのだろうか。次節以降、心の哲学において提示される意識の表象説にしたがって、両者の区別を具体的に明らかにしてみたい。

意識の表象説

20 世紀の心の哲学において、中心的課題の一つは心の自然化であった。自然科学分野の発展にともない、人間の心についても自然科学的な枠組みのもとで理解しようとする試みが成されてきた。心の自然化を目指すにあたって、心の哲学は行動主義から出発し、心脳同一説を経るなかでそれらの問題点が指摘され、機能主義が標準的な立場となる。機能主義は、「心的状態や心的過程を、それら相互の因果的ないし機能的関係、外界からの知覚入力との関係、行為として表出される行動出力との関係によって定義する」[Harman 244]。つまり機能主義とは、心的状態を因果関係によって定義される機能的状態であると解する立場である。機能主義は、信念、欲求などのいわゆる命題的態度については適切な説明を与えるように思われたが、1970 年代以降、機能主義によっては意識経験、特にクオリアを理解することはできないという批判が現れるようになる。これに対して、ハーマンはクオリアを機能主義の枠内で理解しようと試みる[7)]。現在、意識を自然化するという試みにあたってもっとも有望だと考えられているの

7）Gilbert Harman, “The Intrinsic Quality of Experience”, Gilbert Harman, *Reasoning, Meaning, and Mind*, Oxford University Press, 1999, pp. 244–261.

は、「意識の表象説」（the representational theory of consciousness）であり、ハーマンは意識の表象説の一要素を成すクオリアに関する志向説を展開する。ハーマンは志向性概念のあり方を検討することによって、クオリアに関する誤解を解消しようとする。本節ではこのハーマンの試みのなかに登場する、「経験の志向的対象の内在的性質」（intrinsic features of intentional object of experience）と「経験そのものの内在的性質」（intrinsic features of the experience itself）との区別を取り上げる。

機能主義に対する批判において、クオリアが非物質的な実体や性質であることが指摘され、クオリアという経験の内在的な質を機能的定義によってとらえることはできないとされる。たとえば赤いリンゴを見たときに、この経験における独特な「赤さ」の感じは、リンゴの持つ性質ではなく、経験そのものに備わる非物質的な性質であると考えられる。これに対してハーマンは、表象の内在的性質と表象される対象の性質とを区別することによって、われわれが経験においてクオリアを非物理的なものとして見出しているわけではないことを指摘する。この議論を確認しよう。

まず、表象そのものの性質と表象された対象の性質とは、明らかに異なる。ハーマンは明解な具体例を挙げる。

> 表象された対象の性質と表象そのものの性質を区別することがきわめて重要である。これら二つの性質は大きく異なりうるということは明らかである。ユニコーンは四本足で一本の角を持つものとして描かれる。しかしユニコーンの絵は四本の足も一本の角も持たない。絵は平らで絵の具に覆われている。しかしユニコーンは平らなものとして描かれているわけでも、絵の具に覆われたものとして描かれているわけでもない。同様に、ユニコーンは足や角を持つものとして想像されるが、想像することは足や角を持たない。ユニコーンを想像することは心的活動であるが、ユニコーンは、活動として想像されるわけでも、心的なものとして想像されるわけでもない。［Harman247］

ユニコーンの描かれた絵は、表象の一種である。この絵は、ユニコーンを示すような絵の具のパターンや各種の絵の具の色、あるいは「絵」であることを表象する。また、絵についての表象そのものは、足や角を持つわけではない。他方で、絵に描かれたユニコーンは絵によって表象された対象であり、ユニコーンの性質として足や角があることが確認できる。さらに、ユニコーンの想像において表象される対象であるユニコーンは足や角を持つけれども、想像することそれ自体が足や角を持つわけではない。あくまで、ユニコーンについての想像において、ユニコーンの性質はユニコーンに帰せられ、想像などの心的活動にユニコーンの性質が帰属しているわけではない。したがって、表象そのものの性質と表象される対象の性質は、明らかに異なるといわれる。この違いが、「経験そのものの内在的性質」と「経験の志向的対象の内在的性質」との区別である。ハーマンは、機能主義に対する批判がこの区別を混同しているために妥当ではないという。

> 今や、この議論（論者注：経験の内在的な質を機能的定義によってとらえることはできないとする議論）は経験の志向的対象の質と経験そのものの質を混同しているために失敗しているということがわかる。足の痛みやリンゴの赤さの経験に注意を向けるとき、私は、足で生じていることの質やリンゴの質に注意を向けているのである。この質はおそらく、足に生じていることの内在的性質や、リンゴの表面の内在的性質として現れるのであり、経験の内在的性質として現れるものではない。そして、あなたは経験の内在的特徴を意識しているのではないから、機能主義は経験の内在的特徴を捨象しているという事実は、機能主義はあなたが意識しているものを何か取り逃がしている、ということを示しているわけではないのである。　［Harman253］

一般に、経験とは何かについての経験であり、経験は志向性を持つといえる。そして、志向性を持つもの、すなわち表象については、表象そのも

のの性質と表象が表すもの（志向的対象）の性質とを明確に区別しなければならない。さらに、この区別に基づけば、クオリアは経験の内在的性質ではなく、経験の志向的対象の性質であることがわかる。たとえば、赤いリンゴを見るという視覚経験において、リンゴの持つ独特の赤さは経験の内在的性質ではなく、経験の志向的対象であるリンゴの性質として経験される。上記の引用においても、足の痛みのクオリアは、足の痛みの「経験の内在的性質」として現れるのではなく、「足に生じていることの内在的性質」（足の痛みという「経験の志向的対象の質」）として現れると述べられる。つまり、足の痛みは経験の内在的性質ではなく、経験の志向的対象である「足に生じていること」に帰属することになる。同様に、リンゴの赤さは経験の内在的性質に帰属するのではなく、リンゴという経験の志向的対象の質ということになる。あくまで、リンゴの赤さはリンゴの有する質である。したがって、クオリアとは経験の志向的対象の性質であり、クオリアが非物理的な性質ではないということが帰結することによって、機能主義への批判は妥当ではないということになる。以上より、表象と表象の志向的対象とを区別することによって、ハーマンはクオリアを機能主義の枠組みにおいて理解することが可能であることを示唆する。このような見解がクオリアに関する志向説である。

以上のように、クオリアの志向説において特徴的であるのは、経験の内在的性質と経験の志向的対象の性質とを区別する点である。この区別によって、クオリアが経験の志向的対象の性質として扱われることになる。その結果、クオリアが非物質的な性質ではなくなるところに、意識の自然化における説明上の利点が生まれるといえる。他方で、経験における表象そのものと表象の志向的対象とはいずれもわれわれの経験を成す要素である。両者がいかにして経験において成立しうるのか、ホワイトヘッドの体系において位置づけてみたい。

ホワイトヘッドの体系における表象と表象の志向的対象

現実的存在の生成において、多様な事物との関係が先行するホワイトヘッドの体系では、いかなる事物であれ、それ自体で存立する個体が認められない。すなわち、意識を有する主体とその対象は前提とされない。したがって、主体が「主体として」現れてくる事態と、対象が「対象として」現れてくる事態が多様な関係性に基づく生成の過程において説明されることになる。この過程のなかで対象が「対象として」現れてくる事態を説明するために、命題という与件があるといえる。したがって、ある一つの命題は、いまだ何らの概念的分析を加えられていない生（ナマ）の与件が「対象」として現れてくるための一つの可能態としてある。こうした命題についてホワイトヘッドは以下のように述べる。

> 命題というのは、現実態に関する観念であり、事物についての示唆であり、理論であり仮定である。それを経験のうちに抱懐することは、多くの目的に役立つ。命題は、「現象」の極端な事例である。というのは、論理的主語である現実態は、述語を例示するという装いにおいて解されているのだから。命題を無意識的に抱懐することは、経験の原初相の「実在」から最終相の「現象」への移行におけるある段階である。［AI244］

生（ナマ）の与件を「それ」として端的に示す論理的主語と、「それ」を限定する述語的パターンとの統合からなる命題は、ある現実態（生（ナマ）の与件）に関する見方、現実態についての表現を、今、生成しつつある当の現実的存在に提示する。命題は、生（ナマ）の与件をいかにとらえるか、またどのようなもの「として」あるのかという可能性の一つとして感受される。したがって、命題は、現実態をそのようなもの「として」とらえる一つの可能性、一つの見方の表現という意味で、生（ナマ）の与件のあり方を解釈するための「理論であり仮定である」［AI244］といわれる。さらに、命題は事実としてある

生(ナマ)の与件に基づきつつ、その可能的な表現の一部として生成の過程に現れるという意味で、意識以前に、ある現実態についてのもっとも先鋭化された現象であるといえる。すなわち、命題の感受によって、はじめて「なにものでもない」生(ナマ)の与件に対して「それはコップである」とするような一つの見方が可能性として現れてくるのである。

われわれの意識は通例、何かに向けられている。心が志向的であるとは、それが何かについての状態あるいは出来事であるということを示唆する。ホワイトヘッドの体系において、以上の解釈を踏まえれば、表象における「何かについて」を表すものが命題だといえる。すなわち、命題を表象の志向的対象として理解することが可能である。命題の論理的主語はある一つの現実的存在の生成において、現実的存在の「観点」（perspective）において開かれた現実世界のなかのある特定の一部分を「それ」として指示する。さらに、論理的主語と現実的存在の限定質である永遠的客体を述語的パターンとして統一することによって、世界において経験されうるものが何であるのかを提示する。つまり、それが何であるのか、「何かについての」経験のあり方を示す。したがって、表象において心が向けられている対象である志向的対象は、ホワイトヘッドの体系においては命題に相当するといえる。

他方で、この命題をもとに過去の事実である生(ナマ)の与件ならびに他の命題との統一によって生じるコントラストは、生成における構造上、心的表象として解することが妥当であると考えられる。意識的な知覚表象が生じる「意識的知覚」（conscious perception）を例として見てみよう。

> まず、一つの基礎となる物的感受があり、そこから一連の感受全体が当の「主体」にとって生起する。この物的感受から、「知覚的」と称される種類の命題的感受が生じる。意識的知覚は、知覚的感受とこの原初的な（original）物的感受との統合から生じる比較的感受である。
>
> ［PR268］

現実的存在の生成において、物的感受の相から、知覚的感受と称される命題的感受が派生し、意識的知覚は、初発の物的感受と命題的感受との統合によって生じることが確認できる。

> これら二つの要因（論者注：原初的な物的感受とそこから派生した知覚的感受）の意識的知覚への統合は、こうして、事実としての結合体と、それ自身から派生し、それ自身に限定され、それ自身において例証された可能性とを対比する（confronts）。この対比が、統合的感受の客体的与件である類的コントラストである。こうして、主体的形式は実現された可能性という点において、結合体が現実に何であるかについての、生き生きとした直接的意識を帯びる。［PR269］

物的感受の与件は、生（ナマ）の与件である「事実としての結合体」である。また、上記引用において述べられる可能性とは、「二つの要因」から考えれば、知覚的感受の与件である命題であることは明らかである。意識的知覚の発生において、事実としての生（ナマ）の与件と命題とが対比されると述べられる。さらに、この「対比」（confrontation）そのものが感受され、コントラストという与件を成し、意識的知覚が生じると説明される。つまり、コントラストの感受によって、生（ナマ）の与件が何として知覚されうるかが判明なものとしての意識が発生する。命題が提示する志向的対象が生（ナマ）の与件である事実との統合という関係において、意識は生じてくる。したがって、意識にのぼり「何かについて」を表す与件がコントラストであるならば、コントラストを心的表象として解することは妥当であると考えられる。

どのような知覚理論においても重要なのは、正常な知覚に加えて誤った知覚を説明する能力があるかどうかである。命題は、この対比において事実との整合／不整合が問われることになる。命題と生（ナマ）の与件である事実とが整合する場合は、意識的知覚は、知覚されうるもの（命題）が事実そのとおりに知覚される事態となる。他方で、命題と事実とが整合しない場合

には、幻覚や錯覚のようにそこに実在する対象とは異なったものが知覚されるか、あるいは実在しない対象を知覚することになる。このように、命題ならびにコントラストに基づいた意識論において、コントラストという心的表象について知覚における誤謬が生じることも説明しうる。以上より、ホワイトヘッドにおける意識の表象説が一定の説明能力を有することを明らかにできたと思う。

現実的存在の生成の最終段階において意識が生じてくる。意識が発生するのは、コントラストという与件の感受によってである。意識的経験は、何かについての経験である必要があり、コントラストはその何かを表す心的表象として解釈しうる。さらにこの心的表象の志向的対象が命題である。命題は「それ」（われわれが経験しうるものの可能性）が何かについて提示する。現実的実質の生成における高次の諸相で感受される与件をこのように解釈することによって、心の哲学において扱われている概念群をホワイトヘッドの体系においても導入することができる。その結果、少なくとも心の哲学における意識の表象説やクオリアに関する議論等にホワイトヘッドの哲学も参与しうる端緒が開けたといえるだろう。

結語にかえて——ホワイトヘッドの哲学と心の哲学との親和性について

ここまでの議論を踏まえれば、本稿は心的表象や表象の志向的対象をホワイトヘッドの体系に位置づけることによって、ホワイトヘッドにおける意識の表象説を展開するための基礎を示したに過ぎない。ホワイトヘッドの体系と心の哲学とを接続させることによって、両者にどのような貢献をなしうるかは未知である。しかし、ホワイトヘッドの命題概念と命題に基づいた「経験のより高次の諸相」（The higher phases of experience）で語られる経験論には、間違いなく他の哲学との議論を可能にする豊饒な体系が存在する。反対に、他の哲学分野との対峙・対話によって、ホワイトヘッドの体系を解釈しうる可能性も当然ある。

心の哲学における意識の表象説については、課題もある。たとえば、ど

のような条件に基づいて心的表象が意識的経験となるのかを明らかにすることが挙げられる。心的表象にはさまざまなものがある。しかし、そのすべてが意識的経験となるわけではない。われわれは、「地球は太陽の周りを回っている」という信念を常に持っているが、意識的にそのように考えているとき以外は、この信念の内容は意識的経験とはならない。それゆえ、ある心的表象が意識的経験となるためには、何らかの条件を満たす必要があり、その条件を明らかにする必要がある。これに対して、どのような経験が意識にのぼるかについて、ホワイトヘッドに即して回答する準備がある[8)]。また、この課題に対しては、心の哲学の側では、心的表象が生じたうえで、さらにその心的表象についての心的表象が成立することによって初めて第一の心的表象が意識的経験になるという高階の表象説（higher -order representational theory）のような考えもすでに提示されている。したがって、こうした理論とホワイトヘッドの体系との整合性についても検討しうる。

さらに、ホワイトヘッドの命題を用いて、ラッセルの考案した「命題的態度」（propositional attitude）をめぐる問題群へも射程を広げることが可能だと考える。というのも、ホワイトヘッドの体系においてコントラストとは知覚のみならず、ある命題に対して信念、欲求、意図、否定等のさまざまな態度を示しうる与件であるからだ。なぜなら、命題に基づき主体がどのような経験を成すかを方向づける現実的存在の「主体的形式には、情動、価値づけ、目的、好み、忌避、意識等々というような多くの種が存在する」［PR24］からだ。特に、命題ならびにコントラストは意識における否定を扱いうる。「肯定―否定のコントラスト」において、否定を成していたのは命題であった。知覚が命題的態度に含まれうるか否かは、心の哲学においても中心的な問題の一つであるけれども、ホワイトヘッドは知覚を例として意識が事実に対する否定的内容を持つことができる点につ

8）拙著『日常の冒険 ホワイトヘッド、経験の宇宙へ』春風社、2021 年、200-203 頁を参照。

いても説明している[9)]。

以上のような論点においてもホワイトヘッドの哲学は、心の哲学との親和性を有するといえるだろう。しかし、ホワイトヘッドにおける意識論を表象説として解するならば、表象説が抱える課題も引き受けなくてはならないことになる。意識の表象説は、通常の知覚経験にくわえて、幻覚や錯覚などを説明する上での利点がある。

> ここで、われわれは可能的な事態をもちだしたくなる。赤いトマトの知覚経験は赤いトマトがあるという事実、すなわち実際に成立している現実的な事態を表しているわけではないが、赤いトマトがあるという可能的な事態を表している。この可能的事態はじっさいに成立して現実的な事態となることもあるが、そうではなくたんに可能性にとどまることもある。可能的事態は現実化しなくとも、可能的なものとしてつねに存在する。赤いトマトの知覚経験は、そのような可能的な存在としての、赤いトマトがあるという事態を表象しているのである。
>
> ［信原（2002）110 頁］

表象説にしたがえば、意識的経験は心的表象の一種であり、心的表象の表す内容はすべて経験の志向的対象である。表象の志向的対象が可能的なあり方をしているならば、幻覚や錯覚などを説明するうえで都合がよいように思われる。また、ホワイトヘッドの命題はまさにこうした可能的なあり方をしている与件である。しかし、可能的なあり方をする対象を認めるならば、心の哲学が目指す心の自然化を阻むことになる。というのも、心の自然化を試みる物理主義者であれば、可能的存在を認めることができないからだ。他方で、ホワイトヘッドの現実的存在は、それがどのような経験であれ、心性（mentality）を備えていることが主張される。さらに、命

9）拙著『日常の冒険 ホワイトヘッド、経験の宇宙へ』春風社、2021 年、197–199 頁を参照。

題における述語的パターンである永遠的客体は事実上、感覚与件（sense-data）として機能する。心の自然化において、感覚与件という非物理的な対象を導入することは当然、許容されない。これらの点については、自然化を試みる心の哲学の議論とホワイトヘッドの体系とでは齟齬をきたす。とはいえ、こうした課題や問題について、いかに解消を試みるかという議論のなかで、心の哲学における議論や概念群によってホワイトヘッドの意識論について解明を行っていくとともに、ホワイトヘッドの体系において明らかになる知見を心の哲学に還元することが可能であると考える。

参 考 文 献

Chalmers, D., *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press, 1996.（デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識する心―脳と精神の根本理論を求めて―』林一訳、2001 年。）

Chalmers, D., *The Character of Consciousness*, Oxford University Press, 2010.（デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識の諸相〔上・下〕』太田紘史、源河亨、佐金武、佐藤亮司、前田高弘、山口尚訳、春秋社、2016 年。）

Crane, T., *The Mechanical mind — A Philosophical Introduction to Minds, Machines and Representation*, Penguin Books, 1995.（ティム・クレイン『心は機械で作れるか』土屋賢二監訳、勁草書房、2001 年。）

Gilbert Harman, *Reasoning, Meaning, and Mind*, Oxford University Press, 1999.

Kraus, Elizabeth M., *The Metaphysics of Experience: A Companion to Whitehead's Process and Reality*, Fordham University Press, 1998.

Whitehead, A.N., *Process and Reality; An Essay in Cosmology*, Corrected Edition, Ed. by Griffin David Ray and Sherburne Donald W., The Free Press, 1978.（A.N. ホワイトヘッド『過程と実在（上）』山本誠作訳、松籟社、1984 年、A.N. ホワイトヘッド『過程と実在（下）』山本誠作訳、松籟社、1985 年。）

Whitehead, A.N., *Adventures of Ideas*, The Free Press, 1967.（A.N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本誠作他訳、松籟社、1982 年。）

佐藤陽祐『日常の冒険　ホワイトヘッド、経験の宇宙へ』春風社、2021 年。

鈴木貴之『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろう　意識のハード・プロブレムに挑む』勁草書房、2015 年。

信原幸弘・太田紘史編、『シリーズ 新・心の哲学 II 意識篇』勁草書房、2014 年。

信原幸弘『意識の哲学　クオリア序説』岩波書店、2002 年。